

編集にあたって 姜尚中

巻頭言 重松伸司

凡例

第1章

韓国財閥

永野慎一郎

はじめに

金性洙

(一八九一～一九五五)

005

金性洙の家門／土地資本家としての金一族／新学問に目覚めた金性洙／日本留学——早稲田大
学で学ぶ／教育事業の開始——中央学校経営権の引受／産業界への進出——京城織紐の引受／
民族企業・京城紡織株式会社設立／朝鮮最大の近代的民族企業「京城紡織」／民族新聞「東亜日
報」創刊／名門私立大学・高麗大学の設立／解放後の政治活動——副大統領就任／金性洙に関
する親日反民族論争

003

李秉喆 (一九一〇～八七)

035

鄭周永 (一九一五～二〇〇一)

039

辛格浩 (一九二一～二〇二〇)

042

金宇中 (一九三六～二〇一九)

045

李源萬 (一九〇四～九四)

048

朴泰俊 (一九二七～二〇一一)

052

その他の人物

056

安在祐／李熙健／金喆浩／金翰寿／金熙秀／金坪珍／徐甲虎／朴炳憲

第2章

在日朝鮮人前史

水野直樹
樋口雄一
布袋敏博

はじめに

金天海

(一八九八？)

066

霊源寺で修行／関東大震災に遭遇／労働者の町、神奈川を实践の場に／治安維持法による弾圧の
対象に／朝鮮共産党日本総局責任秘書に／公判闘争と秋田刑務所での服役／『朝鮮新聞』の発行

063

と再逮捕／非転向を貫く／解放、そして政治犯の釈放／日本共産党中央委員の朝鮮人部代表として／団体等規正令の公布、朝連の強制解散／共産党員の追放と共和国での金天海／民衆と共に

朴春琴（二八九一～一九七三）

朴烈（一九〇二～七四）

金史良（一九一四～五一）

金文準（二八九三～一九三六）

鄭泰重（一九〇一～五〇）

その他の人物

金斗鎔／全允弼／韓徳銖／金龍濟／曹寧柱／宋性徹／金達寿／金石範／金時鐘

088 087 085 084 082 081

第3章

京城帝国大学の人々

林慶澤

はじめに

101

今西龍（二八七五～一九三二）／高橋亨（二八七八～一九六七）

時枝誠記（一九〇〇～六七）／小倉進平（二八八二～一九四四）

安倍能成（二八八三～一九六六）／尾高朝雄（二八九九～一九五六）

三宅鹿之助（二八九九～一九八二）／泉靖一（一九一五～七〇）

107

一、総長たち 京城帝大総長——服部宇之吉、志賀潔ほか五名／京城帝大設立以前の東洋史・朝鮮史研究の動向／朝鮮史講座の開設——白鳥庫吉、池内宏

二、歴史学 朝鮮関係講座／「朝鮮史学の開拓者」——今西龍／「過去（古代）の復元」——小田省吾／朝鮮に関する文献収集・保存——藤田亮策／「朝鮮史編修会」の人々と京城帝大朝鮮史学——崔南善と李丙薫

三、儒教 朝鮮総督府の儒教政策と京城帝大の朝鮮儒学研究／朝鮮儒学研究——高橋亨／朝鮮文学研究

四、言語学・国語学 京城帝大の言語・文学系講座／植民地帝大の「国語」——上田万年／言語政策の第一人者——保科孝一／国語学と植民地朝鮮——時枝誠記／植民地大学の言語学——小林英夫／朝鮮語学——小倉進平、前間恭作／世界的な中国語学・音韻学者カールグレンの弟子——河野六郎／京城帝大言語学の終焉——金寿卿

五、哲学 哲学科のリベラリスト——安倍能成
六、法学 法学科の教授たち／「知の二重構造」——清宮四郎／現象学的国家学の構築——尾高朝雄

七、経済学 京城帝大を揺るがせた三宅鹿之助事件／三宅鹿之助と朝鮮人京城帝大助手——兪鎮午、崔容達、李康国、朴文圭／助手たちのその後

八、文化人類学 探検家、オルガナイザー——泉靖一／文化人類学者としての「オロチョン調査」／大陸資源科学研究所

台北帝国大学と戦後台湾における
学知・学縁の継承——岩生成一を中心に

周婉窈

はじめに

181

岩生成一（一九〇〇～八八）

188

- 一、台北帝国大学における南洋史の教育・研究
- 二、戦後台湾の台湾史研究との関係
- 三、戦後日本・台湾における研究者の深き縁

中国統一から戦後台湾へ

土田哲夫

はじめに

227

蔣介石（一八八七～一九七五）

228

蔣介石への評価と研究

- 一、生い立ちから権力への道 郷里溪口と少年時代／日本留学／辛亥革命期 陳其美の下での活動／孫文の信任獲得まで／黄埔軍校校長／国共合作・国民革命
- 二、統一と近代国家建設をめざして 北伐と党内抗争／宋美齡との結婚／第二次北伐／南京国民政府と近代国家建設／集権化と反蔣運動／滿洲事変と「安内攘外」／華北危機／西安事変
- 三、日中戦争——苦難と自立・大国化 日中開戦／抗日戦略——外交と宣伝／対米外交／太平洋戦争開戦／「四大国」化／戦時中国の危機
- 四、戦後の挫折から台湾統治へ 対日勝利／戦後再建の模索／国共内戦／敗戦と台湾移転／親米・自由標榜／台湾での強権体制

宋一族——宋嘉樹（一八六一～一九一八）／宋靄齡（一八八九～一九七三）

宋慶齡（一八九三～一九八二）／宋美齡（一八九七～二〇〇三）

宋子文（一八九四～一九七二）

257

宋嘉樹／宋靄齡／宋慶齡／宋美齡／宋子文

汪精衛（一八八三～一九四四）

267

張学良（一九〇一～二〇〇一）

271

蔣経国（一九一〇～八八）

273

その他の人物

278

CC系と復興社系／王世杰／戴季陶／胡漢民／馮玉祥／
李宗仁／田中義一／張作霖／近衛文磨／周仏海／

第6章

自由主義の開拓者、 胡適と陳寅恪の生涯

緒形 康

はじめに

胡適 (一八九一～一九六二)

- 一、寛容の自由主義を求めて 中国思想史における偉大な文献／迷信信仰と新しい文献学／社会主義から計画主義へ／再び「王制」を論ず
- 二、日中の比較近代化論 冀朝鼎という人物／忠誠対象の転位——『菅原伝授手習鑑』と『趙氏孤児』／中国の文芸復興／悲しみの儒学
- 三、胡適のジェンダー問題 新時代の女性、イーディス／彼女は寝台に駆け込み、カーテンを降ろした／江冬秀を理解しようとしなかったニクソン大統領／『山中日記』、そして日記の間——胡適と曹誠英／「八宝箱」騒動始末
- 四、自由主義と中国共産主義 胡適の懺悔／一九四八年「ソビエト・ロシア論争」／「陳独秀の最後の見解」／朝鮮戦争の戦火の中で——傑作「スターリンの大戦略下の中国」／中国人民の「疑う自由と疑いを表現する自由」の伝統を抑え付けることは決してできない

295

291

陳寅恪 (一八九〇～一九六九)

- 一、近代中国の自由主義宣言——独立の精神、自由の思想 思想にして自由でなければ、死を選ぶ他はない／庾信という式臣形象／「科学院への回答」と『論再生縁』／男装の彼女は明朝復興運動に挺身した
- 二、陳寅恪の遺言と自由主義の未来——その「暗号」と「式臣のテキスト解釈学」 「家族史」という「暗号」／始まりとしての客家「棚民」／遺著「寒柳堂記夢未定稿」／「天竺」を体、華夏を用い——開かれた自由の解釈学

323

顧頡剛 (一八九三～一九八一)

陶行知 (一八九一～一九四六)

羅隆基 (一八九八～一九六五)

熊十力 (一八八五～一九六八)

雷海宗 (一九〇二～六二)

殷海光 (一九一九～六九)

その他の人物

蔡元培／ジョン・デューイ／ハロルド・ラスキ／陸小曼／林徽因／

土田杏村／室伏高信／鈴木大拙／傅斯年／王世杰／余英時

348

346

344

342

340

339

337

毀誉相半ばする革命のカリスマ

石川禎浩

はじめに

363

毛沢東（一八九三～一九七六）

366

- 一、若き日の毛沢東 初期の党員としての活動／どんな人が共産党員になったのか
- 二、共産党指導者への歩み 農村革命の指導者として／不遇時代と党指導者への返り咲き／植民地型社会における国外経験／長征と復権／抗日戦争と党内指導権の確立／ソ連の影
- 三、中国の最高指導者として 建国の父／絶対的指導者への道／募りゆく不満と社会主義への挑戦／反対分子の一扫／文化大革命／文と共に永遠に生きる／夢想とも言える決意と自信

劉少奇（二八九八～一九六九）

394

周恩来（二八九八～一九七六）

397

四人組——江青（一九一四～九二）／張春橋（一九一七～二〇〇五）／

姚文元（一九三一～二〇〇五）／王洪文（一九三五～九二）

400

郭沫若（二八九二～一九七八）

402

ヨシフ・スターリン（二八七九～一九五三）

405

エドガー・スノー（一九〇五～七二）

408

馬寅初（二八八二～一九八二）

411

ニキータ・フルシチョフ（二八九四～一九七二）

412

その他の人物

414

朱徳／林彪／彭徳懷／胡喬木／王明／リチャード・ニクソン／

ヘンリー・キッシンジャー／田中角栄

東南アジアにおける
反植民地闘争と国民国家の創生伊東利勝／中野 聡／菅原由美
玉田芳史／小泉順子／菊池陽子
新谷春乃／左右田直規／今井昭夫

はじめに

421

フィリピン

ホセ・リサール（二八六一～九六）

427

生い立ち／民族運動家・作家としての生涯／民族英雄——繰り返される再審

ビルマ（ミャンマー）

アウン・サン（一九一五～四七）

437

社会科学の陥穽／学生運動の闘士／武力獲得へ向けて／日本の触手／南機関の空手形／自前の軍隊をもつ／日本軍を排撃／宿敵の再来／念願の独立／国民国家の呪縛／「仏教徒ビルマ人」の国家／統合の主導権争い／悲劇の英雄

インドネシア

スカルノ（一九〇一～七〇）

オランダ領東インド時代の独立運動／日本軍政期の活動／独立戦争と議会制民主主義／「指導される民主主義」／九月三〇日事件

451

タイ（シヤム）

ピブーン（一九一七～一九六四）

近代化と絶対王政／人民党／立憲革命／国民国家建設／国民文化と国民形成／戦後のピブーン

462

ラーマ五世（チュラーロンコーン）（一八五三～一九一〇）

472

その他の人物

476

グレゴリオ・アグリパイ／アンドレス・ボニファシオ／
エミリオ・アギナルド／ウイリアム・タフト／ベニグノ・ラモス／
マヌエル・ケソン／ホセ・ラウレル／ソール・バ・ウー・デー／
チョクロアミノト／モハマッド・ハッタ／アブドウル・ムイス／
プラムディヤ・アナンタ・トウル／ダムロン親王／
ラーマ六世（ワチラーウット）／プラヤー・アヌマーンラーチャトン／
ペサラート／シーサワンウォン／スワンナプーマー／

スパークヌウォン／ソン・ゴク・タン／ノロドム・シハヌーク／
トウー・サモット／オン・ジャアファル／チン・ペン／
ファン・ポイ・チャウ／ファン・チャウ・チン／ニヤット・リン／
グエン・タイ・ホック／ホアン・ゴック・ファック

第9章

インド自立への道——ペルソナ誕生の背景

重松伸司
白田雅之

はじめに

501

ガンディー（一八六九～一九四八）

505

さまざまな「実験」

一、忘我・享樂期　グジャラート州ポールバンダル／幼児結婚と肉欲の葛藤／「文明化」の実験、
ロンドン／ユーモアの人／新米弁護士誕生
二、「覚醒期」、ナタールでの実験　「新しき村」、アーシユラムの実験／アーシユラムの実験と限
界／欲望という名の暴力／妻と子に託しての「欲望と奉仕」／ガンディーの女性観／ナタールの
サッティヤーグラハ／サッティヤーグラハ運動の始まり
三、誓願の執着期　ガンディーと不可触民／奉仕の精神と「科学的」実践／政治化された「神の
子」／行動する聖人／インド民族運動の地域的展開／ガンディーの「拒否」運動／国際的な博

愛主義へ

四、ガンディーのジレンマ 変質する「断食」／南インドから見たガンディー／「インドを立ち去れ」運動／日本とガンディー／二人のボース／コムニズム・コムナリズム・サツティヤグ
ラハ／イスラーム維新運動とガンディー／ガンディー最後の「実験」

ラビーンドラナート・タゴール（二八六一～一九四二）

ムハンマド・アリー・ジンナー（二八七六～一九四八）

チャクラヴァルティ・ラージャゴーパール・チャーリー（二八七八～一九七二）

E・V・ラーマスワミー（ナイイツカル）（二八七九～一九七三）

ビームラーオ・ラームジー・アンベードカル（二八九一～一九五六）

スバス・チャンドラ・ボース（二八九七～一九四五）

その他の人物

ダーダーバイー・ナオロージー／アラン・オクタヴィアン・ヒューム／

バンキム・チャンドラ・チャタジー／ギルバート・エリオット・ミントー／

スレンドラナート・バナルジー／ラメーシュ・チャンドラ・ダット／

パール・ガンガダル・テイラク／ビピン・チャンドラ・パール／

ジョージ・カーゾン／パンディット・モティラール・ネルー／

ラーラー・ラージパット・ラーイ／ゴパール・クリシュナ・ゴーカーレー／

チッタランジャン・ダス／オーロビンド・ゴシユ／アリー兄弟／

ジョン・サイモン／アブル・カラム・アーザード／G・D・ビルラー／

ルイス・マウントバッテン／バガット・シン／

571 566 560 557 553 547 543

E・M・S・ナンブーデイリパード／ナトラム・ヴィナヤク・ゴドセ

第10章

第二次世界大戦後のイラン

——モハンマド・モサッデクと二人の国王

貫井万里

はじめに

レザー・シャー・パフラヴィー（二八七八～一九四四）

589

モハンマド・モサッデク（二八八二～一九六七）

603

一、カージャール朝期

二、レザー・シャー期

三、デモクラシー期の到来と政界復帰

四、石油国有化運動

五、一九五三年八月クーデター

六、石油紛争の終結

モハンマド・レザー・シャー・パフラヴィー（二九一九～八〇）

626

アボルカーセム・カーシャーニー師／ナツヴァーブ・サファヴィー／
セイエド・ズイヤールオツディーン・タバータバーイー

第11章

戦前と戦後、 その連続と断絶の象徴

吉田 裕／茶谷誠一
手嶋泰伸／源川真希
古川隆久／瀬畑 源

はじめに

昭和天皇（一九〇一～八九）

- 一、天皇になるまで 期待を背負つての誕生／帝王学を学ぶ／後世にまで影響を与えた訪欧旅行
／摂政就任と信頼する側近との出会い
- 二、天皇即位から敗戦まで 即位と田中義一首相叱責問題／民政党内閣への支持と反動／近代天
皇制構造の特殊性／満洲事変勃発と天皇の憂慮／熱河作戦と統帥命令の抑制／一九三〇年代の
変化と対応をめぐる混乱／日中全面戦争へ／対米開戦への傾斜／大元帥の戦争指導／「一撃
講和」への固執／二度の聖断による敗戦と玉音放送
- 三、占領期の天皇と天皇制 アメリカの対日占領政策／日本国憲法の制定／東京裁判と昭和天皇
- 四、講和条約の発効から朝鮮戦争の勃発へ 再軍備と昭和天皇／サンフランシスコ講和条約と戦
争責任問題／退位と謝罪
- 五、国際社会と「大衆社会」の中で 国際関係の中の天皇／国民との関係／昭和の終焉

米内光政（二八八〇～一九四八）

宮中グループ

革新官僚グループ

近衛文麿（二八九一～一九四五）

松岡洋右（二八八〇～一九四六）

東条英機（二八八四～一九四八）

ダグラス・マッカーサー（二八八〇～一九六四）

その他の人物

石原莞爾／辻政信／武藤章／板垣征四郎／松井石根／安田せい／
牧野伸顕／鈴木貫太郎／湯浅倉平／木戸幸一／ジョセフ・グルー／
奥村喜和男／和田博雄／毛里英於菟／亀井貫一郎／中野正剛／
西園寺公望／平沼騏一郎／荒木貞夫／真崎甚三郎／斎藤隆夫／
矢部貞治／白鳥敏夫／広田弘毅／重光葵／東郷茂徳／佐藤尚武／
井上成美／山本五十六／岡田啓介／大西瀧治郎／阿南惟幾／
梅津美治郎／連合国軍最高司令官総司令部参謀第二部／
連合国軍最高司令官総司令部民政局／ベアテ・シロタ・ゴードン／
憲法研究会／極東国際軍事裁判／貞明皇后／秩父宮雍仁親王／
高松宮宣仁親王／三笠宮崇仁親王

戦時下の知識人たち——戦時変革とアジア

米谷匡史

はじめに

751

尾崎秀実（一九〇一～四四）

753

民族問題・社会問題への開眼／植民地都市上海と反帝国主義の息吹／西安事件と中国統一化論争
 ／日中戦争下の戦時変革論／近衛新体制運動から太平洋戦争開戦へ

リヒャルト・ゾルゲ（一八九五～一九四四）

775

その他の人物

777

アグネス・スメドレー／宮城与徳／細川嘉六／中西功／
 大上末広／佐藤大四郎／三木清／蠟山政道／東畑精一／
 大河内一男／西田幾多郎／田辺元／和辻哲郎／高山岩男

大転換期における「操觚者」
——プロレタリア芸術運動を中心に

武藤武美

はじめに

789

中野重治（一九〇二～七九）

791

- 一、「詩人の魂」
- 二、マルクス主義への「転向」
- 三、政治文学二元論VS芸術大衆化論
- 四、アジ・プロとアヴァンギャルド芸術
- 五、転向
- 六、「後退戦」から土壇場へ
- 七、戦後——「失敗」からの始まり
- 八、文学者中野の再出発
- 九、『梨の花』
- 一〇、「共同性の湖」
- 一一、「甲乙丙丁」、そして「雑文」

葉山嘉樹（一八九四～一九四五）

809

佐多稲子（一九〇四～九八）

812

福本和夫（二八九四～一九八三）
小林多喜二（一九〇三～三三）
石堂清倫（一九〇四～二〇〇一）

その他の人物

蔵原惟人／小林秀雄／室生犀星／宮本百合子／原泉子／千田是也／伊藤信吉

823 820 817 815

第14章

抵抗と協力のあいだ

——「知識人／編集者」と「もう一つの京都学派」

落合勝人

はじめに

林達夫（二八九六～一九八四）

故郷の不在／根拠地へ／編集者誕生——震災後の鶴沼グループ／宗教哲学という基層／「知識人／編集者」の時代の終焉／手紙の人——小さな社会への関与

831 829

野呂栄太郎（一九〇〇～三四）

花田清輝（一九〇九～七四）

847 844

その他の人物

戸坂潤／中井正一／三木清／吉野源三郎／
岩波茂雄／下中弥三郎／山本実彦／小泉信三

850

第15章

帝国主義的膨張・侵略とその破綻 ——帝国の文化

晏妮

はじめに

李香蘭（一九二〇～二〇一四）

863

- 一、山口淑子から李香蘭への変身
- 二、満洲娘を演じて——女優としての第一歩
- 三、大陸恋愛三部作と歌姫の誕生
- 四、満洲、上海、台湾、朝鮮半島に跨ってアジア映画の大スターとなった李香蘭
- 五、李香蘭に別れを告げる
- 六、李香蘭の転生
- 七、映画界引退後の山口淑子

861

岩崎昶（一九〇三～八一）

882

川喜多長政（一九〇三～八二）

その他の人物

甘粕正彦／張善琨／卜萬蒼／劉呐鷗／服部良一／長谷川一夫／
ランラン・シヨウウ（邵逸夫）／田村泰次郎／陳雲裳／張愛玲

892 887

第16章

帝国日本に抗う女性たち

長志珠絵

はじめに

901

山代巴

（一九二一～二〇〇四）

906

山代巴の戦前／戦後の出発／模索の軌跡と女性たち

森崎和江

（一九二七～二〇二二）

912

植民二世に育って／戦後の自己模索／読み直される森崎作品と炭坑の女たち／「聞き書き」という方法

澤地久枝（一九三〇～）

918

金子文子（一九〇四？～二二六）

922

新垣美登子（一九〇一～九六）

923

執筆者一覧

写真提供・図版出典